

# 西日本方言話者と東京方言話者の 共通語使用場面におけるアスペクト認識

## ー同時進行ナガラ節、テルトコ形のアスペクトについてー

和田 礼子

### 要 旨

従来から共通語と西日本方言は異なるアスペクト体系を持つことが知られているが、本稿は、西日本方言話者の共通語使用場面におけるアスペクト認識について、東京方言話者と、どのような違いが見られるのかを考察する。

同時進行のナガラ節とテルトコ形のアスペクトは継続相で、継続相が動作の継続か、変化結果の継続かは動詞によって異なる。ナガラもテルトコも共通語形式であるが、これらのアスペクト認識は方言によって異なるのではないかという仮説のもと、熊本方言話者、高知方言話者、東京方言話者に調査を行った。

調査は熊本方言のアスペクト形式であるヨル・トル（高知方言話者にはユウ・チュウ）形、共通語形式のテルトコ形、同時進行のナガラ節のアスペクトに関するものである。調査の結果、動詞によって、テルトコ節、同時進行ナガラ節のアスペクト認識には、方言による違いが確認された。

キーワード：アスペクト 西日本方言 共通語使用場面 同時進行ナガラ節 テルトコ

### 1. はじめに

日本語のバリエーションには、性差、世代差、地域差などがある。アスペクトに関しては共通語と西日本方言とでアスペクト体系が異なることが知られている。しかし、このような異なるアスペクト体系をもつ西日本方言話者の共通語使用が、東京方言話者と違いがあるのかといった点については、まだ研究されていない。

個々の動詞が語彙的にもつアスペクト的特徴を、共起する副詞成分を含む動詞句のアスペクト的な意味として整理したものに森山(1988)の時定項分析がある。森山(1988)は、持続的な動きの局面を「動きが運動として展開している期間＝過程」と「動きの結果が持続的である場合＝結果持続」、「動きの結果の保存が主体的に行われ、過程と結果持続の中間的なもの＝維持」と定義し、〈維持〉の局面では次のような「タママ・ナガラ」交替が可能であると述べている。

(1) と、そればかりで頭が一杯になりながら廊下を歩いていく。

→頭が一杯になったまま (森山 (1988) p143)

(2) もたれながら話をする＝もたれたまま話をする (森山 (1988) p156)

また畠山 (2007) は維持の局面を持つ動詞を結果維持動詞と呼び、結果維持動詞を判別するテストの一つとして「タママ・ナガラ」テストを用いている<sup>1)</sup>。(1)(2)のような結果維持動詞では「タママ・ナガラ」を交替しても同じ事態を表すことができるが、次のような結果維持を表さない主体動作動詞では置き換えが不可能となる。

(3) {走りナガラ／??走ったママ} 食べる。(畠山 (2007) p75)

ところで、森山 (1988) は、「着る」を〈維持〉の局面を持つ動詞と捉え、「タママ・ナガラ」の置き換えが可能であるとしている。下の(4)で「着ナガラ＝着たママ」になるにはナガラ節が結果維持を表すことが要求される。

(4) 花子は服を {着ナガラ／着たママ} 3時間接客した。

(4)で東京方言話者はタママ、ナガラを置き換えることができるが、熊本・高知方言話者は置き換えることができない。熊本・高知方言話者はこの「着ナガラ」を動作進行の局面と捉えるためである。

同時進行ナガラ文に関しては、日本語学習者の作文添削などの際に日本語教師の間で文法性判断が分かれることがあるが、(5)のような日本語母語話者が使用する同時進行のナガラ文に関しても同じように文法性判断がゆれる場合がある。

(5) 道ばたで座りながらお菓子を食べる。

(5)は「座って」といった意味合いで使われているようだが、この文を許容するか否かは日本語母語話者でも意見が分かれる。森山 (1988) では「タママ・ナガラ」が置き換え可能な動詞として「座る」をあげているが、日本語教育の教師用参考資料として書かれた岡本他 (2009) では「座りながら話す」「立ちながらしゃべる」は不自然で、それぞれ「座って話す」「立ってしゃべる」が正しいと述べている (p145)。

「座りナガラ」を結果継続の局面を認識できる人は(5)を正用と捉え、これを動作継続の局面と認識する人は非用と捉える。このことから、ナガラ節の動詞のアスペクトをどう捉えるかは、これらの文の文法性判断に大きく関わっていると考えられる。

本稿ではこのような文法性判断のゆれについて、方言によって異なるアスペクト認識が共通語形式であるナガラ節のアスペクト判定に影響を及ぼしているのではないかという仮説を立てる。仮説を検証する方法として、熊本方言の「ヨル・トル」、高知方言の「ユウ・チュウ」共通語の「テルトコ」、同時進行の「ナガラ」が接続した場合の動詞のアスペクトについて調査を行い、西日本方言である熊本方言、高知方言と、東京方言とを比較し、考察する。

以下、2節ではナガラ節のアスペクトについて述べ、3節では共通語と西日本方言のアスペクトについて概観し、さらに熊本方言と高知方言の相違点について述べる。4節では9つの動詞について行った調査結果を踏まえ、各方言話者のナガラ節のアスペクト認識について考察する。

## 2. ナガラ節のAspect

ナガラ節のAspectについて述べる前に、まず動詞の分類について述べておきたい。工藤（1995）はAspect対立の有無の観点から動詞を次のように分類している。

### (A) 外的運動動詞

(A・1) 主体動作・客体変化動詞 (A・2) 主体変化・主体動作動詞

(A・3) 主体動作動詞

### (B) 内的情態動詞

### (C) 静態動詞

外的運動動詞はスルーシテイルが〈完成性＝限界づけられ性〉か、〈継続性＝非限界づけられ性〉かで対立する。外的運動動詞の(A・1)主体動作・客体変化動詞と(A・2)主体変化・主体動作動詞はそこに至れば運動が必然的に尽きるべき目標としての内的時間的限界を持つ「内的限界動詞」であり、(A・3)主体動作動詞はそのような内的時間的限界を持たない「非内的限界動詞」である。また、(A・1)主体動作・客体変化動詞と(A・3)主体動作動詞の継続相は動作の継続を表し、(A・2)主体変化動詞の継続相は変化結果の継続を表す。

Aspect研究は従来主に主節動詞を対象に行なわれてきた。複文では「山頂に着いた時～」のようなトキ節などについては研究されてきたが、ナガラ節のような接続形式に上接する連用形のAspectについては言及されていない。ナガラには同時進行と、逆接という二つの用法があるが、和田（1998）ではナガラ節のAspectに注目し、ナガラ節のAspectが継続相の場合は同時進行、パーフェクトの場合は逆接になると主張している。このようにナガラ節のAspectが意味と相関関係にあるということから、従属節の連用形＋ナガラのAspectについて論じることは、ナガラ文を分析する上で重要であると考えられる。

またAspectは〈出来事の時間的展開性（内的時間）の把握の仕方の相違〉を表す文法的カテゴリーであるが、談話の中では複数の出来事間の時間的関係を表すという機能を持っている。「出来事間の時間関係＝タクシス」はテンス同様、外的時間を表すが、テンスが過去と非過去で対立するのに対し、タクシスは継起的（先後関係）か同時かで対立する。

「出来事間の時間関係」というカテゴリーの中では、完成相は継起性を、継続相は同時性を表すという点で対立している。ナガラのような複文は、一文の中に常に二つの出来事が現れることから、ナガラ節のAspectはナガラ文に現れる二つの出来事のタクシスとも相関する。このことをまとめると表1のようになる。

共通語のAspectはスル（完成相）－シテイル（継続相）で対立するが、ナガラ節の動詞は連用形で、シナガラは動作・変化結果の継続を表したり、パーフェクトを表わしたりする。シテイルはナガラ節ではシテイナガラとなり、動詞の種類に関係なくパーフェクトで逆接となる<sup>2</sup>。

次の(6)(7)のナガラ節は継続相で、主節との関係は同時進行を表す。継続相が動作の継続か、変化結果の継続かは動詞の語彙的Aspectによって異なる。

(6) 僕はTVを睨みながら、しばらくその何かについて考えてみた。

[主体動作動詞] 〈動作の継続〉(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』)

(7) 僕はポケットの中で十字架を握りながら、きっぱりと言った。

[主体変化動詞] 〈変化結果の継続〉(浅田次郎『鉄道員』)

(6)のナガラ節は動作の継続(継続相)で、「睨む」動作と「考える」動作は同時に行なわれている。(7)のナガラ節は変化結果の継続(継続相)で、「握りはじめー握り終わる」という変化は終了しているが、その状態は維持されており、その状態の中、「言う」という動作が行われている。(7)の主節とナガラ節の時間的関係は「同時」である。本稿では、このような同時進行ナガラ節の aspekto を考察の対象とする。

表1 ナガラ節の aspekto とタクシス

| ナガラ節の aspekto   | 接続関係 | ナガラ節と主節の時間的前後関係 (タクシス)              |
|-----------------|------|-------------------------------------|
| 継続相 (動作継続・結果継続) | 非逆接  | 同時                                  |
| パーフェクト          | 逆接   | 先行: (ナガラ節の動作/変化の終了は主節の出来事に先行して起こる。) |

以上を踏まえ、次節では熊本方言の aspekto 体系と共通語の aspekto 体系の違いを確認する。

### 3. aspekto 体系にみられる地域差

#### 3.1 共通語の aspekto 体系と西日本方言の aspekto 体系

共通語の aspekto は形式的にはスル(完了)ーシテイル(継続)で対立する。共通語シテイルは動作継続と結果継続を同じ形式で表現するが、西日本方言では動作・変化過程の継続をシヨル、パーフェクトをシトルと、それぞれ異なる形式で表現する。工藤(2004)は宇和島方言のシヨル・シトルについて「シヨルが時間の中に成立・展開・消滅する〈限界達成前の段階〉を分割的にとらえ、シトルが〈限界達成後の段階〉を先行する運動と関連づけて複合的にとらえる」と述べ、西日本方言の aspekto・テンス体系を表2のようにまとめている。この表から共通語が2項対立であるのに対して、西日本諸方言は3項対立であることがわかる。

表2 共通語と西日本諸方言の aspekto 体系 (工藤 2004)

| 共通語   |    |      | 西日本諸方言 |    |      |        |
|-------|----|------|--------|----|------|--------|
| アスペクト | 完成 | 不完成  | アスペクト  | 完成 | 不完成  | パーフェクト |
| テンス   |    |      | テンス    |    |      |        |
| 非過去   | スル | シテイル | 非過去    | スル | シヨル  | シトル    |
| 過去    | シタ | シテイタ | 過去     | シタ | シヨッタ | シトッタ   |

ヨル・トルという特定の形式を持つことで西日本方言では内的限界動詞の運動の側面と結果の側面をそれぞれ表現することができる。「あく」「あける」という動詞を例にとって考えてみると、共通語では他動詞の「あけテイル」は動作の継続を表しこれに対応する自動詞「あいテイル」は結果を表す。一方、西日本方言では「あけヨル」は動作の継続を、「あきヨル」は変化の途中にあることを表し、不完成性という共通のアスペクト的意味を持つ。そして「あけトル」「あイトル」は動作あるいは変化結果の継続を表す。これをまとめると以下のようになる。

- (8) a あけヨル：終了限界達成前の段階、動作過程の進行・継続性  
 b あきヨル：終了限界達成前の段階、変化過程の進行・継続性  
 c あけトル：終了限界達成後の段階、結果状態  
 d あイトル：終了限界達成後の段階、結果状態

共通語では「着る、履く、かぶる」といった着装動詞はテイル形式で動作の局面と結果の局面を表すことができるが、ヨル・トルの形式を持つ方言では他の変化動詞においても運動の局面をシヨル、結果の局面をシトルの形式で言い表すことができる。

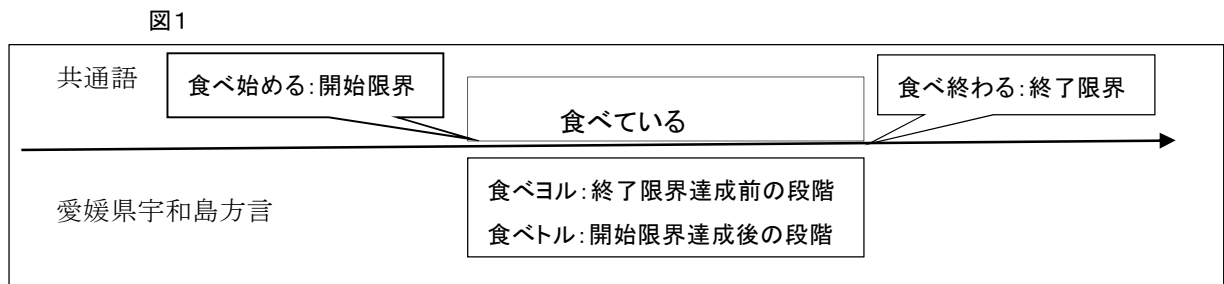
### 3.2 3項対立の方言にみられる地域差－熊本方言と高知方言の相違点

3.1 では西日本方言のアスペクトがスル・シヨル・シトルの3項で対立していることを述べたが、本節では3項対立の方言も一樣ではないという点に注目して論を進める。

西日本方言のアスペクトに関する先行研究として工藤(1995)(1999)(2001)(2004)、畠山(2007)がある。工藤(1995)は愛媛県宇和島方言のスル・シヨル・シトルのアスペクト対立の観点から動詞の分類を行っている。工藤(1995)は愛媛県宇和島方言では運動動詞にはスル・シヨル・シトルの対立があり、状態性動詞はシヨルとシトルの対立が中和すると述べている。中和とは「見える」などの動詞のヨル形、トル形がどちらも同じ意味を表すという現象である。さらに運動動詞の中でも非内的限界動詞においては、(9)のようにヨルとトルが中和する場面があることを指摘している。

- (9) (猫が魚を食べている場面を見て)  
 a 猫が魚を食べヨル。(終了限界前の段階)  
 b 猫が魚を食べトル。(開始限界後の段階)

これを図に表すと、図1のようになる。



中和が起こる理由について工藤(1995)はトルが開始限界達成を表すことで、動作の継続

を表すヨルと同じ状況を表すことができると説明している。

また工藤（2004）は西日本方言の動態として、シトル形式が動作継続（進行）や反復習慣を表す形でシヨル形式と同じアスペクト的意味をもち、この結果シトル形式への一本化が進んでいると指摘している。工藤（2004）の調査では、調査したすべての西日本方言で主体動作動詞ではシヨル形式もシトル形式も動作進行の意味で使用され、一部の方言では主体動作・客体変化動詞でもシトル形式が進行を表すことが報告されている。

工藤（1995）は内的限界動詞ではヨル・トルの中和は起こらないとしているが、畠山（2007）は高知方言のアスペクト形式であるユウ形式（ヨルに相当）とチュウ形式（トルに相当）が内的限界動詞で対立する場合と中和する場合があることを指摘している。畠山（2007）は、高知方言ではヨルが結果維持の局面を表すことで、トルとの中和が起こると説明している。高知方言でユウ・チュウが中和する動詞は、「座る、握る、映る、疑う、見える、住む」など主体変化結果維持を表現する動詞（以下、結果維持動詞）である。結果維持動詞について畠山（2007）は次のように定義している。

- (10) 結果維持動詞とは、主体変化動詞と主体動作動詞の中間に位置する動詞であり、主語が表現する対象の変化、変化の結果状態、その変化結果を維持するという3つが語彙的に指定されている動詞である。

結果維持動詞の中には高知方言では中和を見せるが、熊本方言では動詞によって中和しないものがある。同じ四国の愛媛県宇和島方言も高知方言と、完全には一致しないことから、アスペクト的に3項対立をする方言の中でも違いがあることがわかる。以下、高知方言と熊本方言の中和現象について具体的にみていく。（議論をわかりやすくするために高知方言のユウはヨル、チュウはトルに読み替えて話を進める。）

はじめに熊本方言と高知方言で中和現象が同じように起こる動詞群についてみていきたい。結果維持動詞の中で、「映る、光る、照る」などの現象動詞ではヨル・トルの対立は中和する。

- (11) (暗闇の中でLEDライトが) 光っトル／光りヨル。(光っている)

- (12) (写真を撮ろうとした) カメラマンが鏡に映りヨル／映っトル。(映っている)

また、心理動詞の中の「疑う、思う、信じる、望む、呆れる、安心する」などの動詞、知覚動詞の中の「見える」は中和する。これらは工藤（1995）で状態動詞と呼ばれている動詞群である。

次に高知方言では中和するが、熊本方言では中和しない動詞について見ていく。畠山（2007）は(13) (14)の動詞をヨル・トルが中和する動詞として挙げている。しかし、熊本方言ではこれらの動詞はヨル形では動作・変化の進行を表し、トル形では変化の結果状態を表すため、中和しない。

- (13) 座る、立つ、よりかかる、乗る (姿勢変化動詞)

- (14) つかまる、握る、かつぐ、独占する (保持動詞を意味する再帰動詞)

高知方言では次の(15)は1節で述べた「ナガラ・ママ置換テスト」で置き換えが可能で

あるとされているが、熊本方言話者ではこのテストの判定が高知方言と異なる。

(15) サーフボードに {のりナガラ／のったママ} 砂浜を眺めた。(畠山 (2007) p75)  
高知方言では(15)の「のりナガラ」と「のったママ」は置き換えが可能とされているが、熊本出身の日本語教師4名に行なった調査では4名のうち3名が許容できない、1名が判断に迷うと答えた。(15)「のりナガラ＝のったママ」になるにはナガラ節が結果維持を表すことが要求されるが、これを動作継続として読んでしまうと、ナガラとタママは置き換えられなくなる。

このように、同じ3項対立のアスペクト体系を持つ方言の間でも、ナガラ文のアスペクト認識には違いが観察される。

次節では同時進行ナガラ節のアスペクト認識の地域差について行った調査について報告し考察する。

#### 4 ヨル・トル・テルトコ・ナガラ節のアスペクト調査

##### 4.1 調査の概要

「ヨル・トル」「テルトコ (テイルトコロ)」「ナガラ (同時進行)」に動詞が接続した場合、動きの、どの局面を指しているのかを調べるため、熊本方言話者と高知方言話者を対象に調査を行った。さらに東京方言話者に対しては「テルトコ」、同時進行の「ナガラ」について調査した。

「テイルトコロダ」は「今、警察が現場に向かっテイルトコロダ」「僕は椅子に座っテイルトコロダ」のように〈過程〉と〈維持〉の二通りの局面を表すことができるアスペクト形式である(森山 (1988) p147)。また、寺村 (1984) は「トコロの中心的意味は、ある全体を視野に入れながら、その一部にスポットライトを当てるときのそのスポットライトの当たる部分」(p290)としているように、動詞の動きのどの部分を取り出すのかを知るためのテストとして使うことができる。

調査では「テイルトコロダ」ではなく「テルトコ」という縮約形を使用した。テイルトコロダは書き言葉やフォーマルな場面で使われるなど、使用場面が限られている。テルトコは会話で使われ、様々な場面を想定できることから、無意識の使用を引き出すことができると考え、テルトコを使用した。「テルトコ」も「ナガラ」も方言形式ではないが、方言によって共通語形式の文のアスペクト認識が異なるのか検証するという観点から、調査項目に共通語形式を用いた。

調査対象者は20代から50代の熊本方言話者106名、東京方言話者104名、高知方言話者100名で、年齢構成、男女比はほぼ均等である。調査は以下のような質問に○, ×, △で答えてもらった。

(16) I 下の例文を読んで、それが、どんな状況なのか、答えてください。○は、いくつ付けてもかまいません。迷ったときは△を書いてください。

(例) 雨の降りヨル。 (○) 雨が降っている最中。(×) 雨が降り終わったあと。

雨の降っトル。 (×) 雨が降っている最中。(○) 雨が降り終わったあと。

II 電話で「今何してる?」と聞かれた時の答え、または、イラストなどを見て何が書いてあるか、誰かに説明する場面を想定してください。「今~してるとこ」という文を

言ったとき、どんな状況をさしていますか。○は、いくつ付けてもかまいません。迷ったときは△を書いてください。

(例) 今、雨が降ってるところ。 (○) 今、雨が降っている最中。

(×) 雨が降り終わったあと。

Ⅲ 「次の「～ながら」を使った文を読んでください。「～ながら」の部分は、どのような状況をさしていますか。○は、いくつ付けてもかまいません。迷ったときは△を書いてください。例文がおかしいと思ったら、全部×をつけてください。

(この場合の「ながら」は二つの動作を同時に行なうという意味です。「～のに」に言い換えられるような逆接の意味ではありません。)

(例) ご飯をゆっくり食べながら、友達と話した。

(○) 食べるという動作をしている最中。まだ食べ終わっていない。

(×) 食べたあと。

調査は以下の9つの主体動作・客体変化動詞について行った。

着る, 片付ける, 汚す : 高知方言で中和しない動詞

座る, 立つ, 握る 乗る, よりかかる, ぶらさがる : 高知方言でヨル・トルの中和が起こる動詞

本稿ではこの調査の「動作の進行, または変化過程の進行」の局面と「結果継続」の局面について分析を行う。選択肢で「～最中, 途中」の文言が入るものを「動作の進行, または変化過程の進行」, 「～たあと」の文言が入るものを「結果継続」として取り扱う。

判定に使った文は「ヨル・トル」「テルトコ」は「座りヨル・座つトル・今, 座つテルトコ」という短いものだが, 同時進行ナガラについては, (17) のように文脈的に動作進行ととれるものと, 結果継続にとれるものの2種類を使用した。

(17) a 花子はゆっくり座りながら隣のテーブルを見た。 : 動作進行

B 花子は座りながら30分太郎を待った。 : 結果継続

調査では(17)a.b それぞれについて「～最中」「～たあと」を表しているかどうかを判定してもらった。

回答の中で動作進行の文脈で「～最中」につけられた○を「進行」, 結果継続の文脈で「～たあと」につけられた○を「結果」として数えたものを集計し, その割合を表3,4,5にまとめた。表では「動作の進行, または変化過程の進行」の局面を進行, 「結果継続」の局面を結果と記している。

本稿では○を選んだ人が70%以上のものを, 各方言のヨル・トル・テルトコ・ナガラが表すアスペクトであると考えことにする。表では回答者の70%以上が○と答えたところには網掛けをしている。たとえば東京方言話者のテルトコ形を見ると, 表3の「着る, 片付ける, 汚す」は動作の局面を表しているが, 表4の「座る, 立つ, 乗る」表5の「握る, よりかかる, ぶらさがる」は結果継続の局面を表していることがわかる。このことから「着る, 片付ける, 汚す」のテルトコ形のアスペクトは動作の局面のみであるとする。



表3, 4, 5のヨル・トル形式の調査結果を見ると、熊本方言、高知方言共に、ヨルは動作・変化の進行を、トルは結果継続を表していることがわかる。これは工藤（1999）の調査結果と一致している。

以下、調査した動詞を3つのグループに分け、グループごとに論を進める。一つ目のグループは「着る、片付ける、汚す」で、テルトコ形、ナガラ節がどの方言でも動作進行の局面を表す。二つ目のグループは「座る、立つ、乗る」で、テルトコ形を見ると東京方言話者では結果継続の局面を表すのに対し、熊本方言話者では進行の局面を表す動詞群である。このグループではナガラ節が動作進行と結果継続の両方を表す。三つ目は「握る、よりかかる、ぶらさがる」で、これらの動詞は同時進行ナガラ節が結果継続を表すタイプの動詞である。以下、それぞれの動詞群を見ていく。

#### 4.2 ナガラ節が動作の進行を表す動詞群「着る、片付ける、汚す」

70%以上が○をつけたものを、その方言で認識されるアスペクトであると考え、どの方言話者も「着ナガラ、片付けナガラ、汚しナガラ」は進行中であると認識されている。

「片付ける、汚す」は工藤（1995）では主体動作・客体変化動詞でシテイル形式は動作の進行のみを表すが、「着る」は主体変化・主体動作動詞で再帰動詞と分類されており、シテイル形式で動作進行と結果継続の両方を表す。テルトコ形を見ると進行の局面を表していることから、テルトコ形は動作の進行という運動の局面があれば、そこに焦点をあてていることがわかる。

表3 ナガラ節が動作の進行を表す動詞の判定 (%)

|           | ヨル   |      | トル   |      | テルトコ |      |      | ナガラ  |      |      |
|-----------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|           | 熊本   | 高知   | 熊本   | 高知   | 熊本   | 高知   | 東京   | 熊本   | 高知   | 東京   |
| [着る] 進行   | 100  | 98.0 | 16.0 | 2.0  | 100  | 99.0 | 95.2 | 98.1 | 99.0 | 89.4 |
| [着る] 結果   | 4.7  | 4.0  | 96.2 | 98.0 | 4.7  | 4.0  | 2.9  | 39.6 | 44.0 | 67.3 |
| [片付ける] 進行 | 100  | 99.0 | 45.3 | 7.0  | 100  | 100  | 95.2 | 97.2 | 97.0 | 86.5 |
| [片付ける] 結果 | 9.0  | 0.0  | 70.8 | 91.0 | 0.9  | 1.0  | 1.9  | 27.4 | 20.0 | 30.8 |
| [汚す] 進行   | 96.2 | 94.0 | 23.6 | 5.0  | 97.2 | 96.0 | 82.7 | 89.6 | 94.0 | 76.9 |
| [汚す] 結果   | 9.4  | 4.0  | 96.2 | 97.0 | 1.9  | 2.0  | 10.6 | 39.6 | 38.0 | 61.5 |

網掛けは○を選んだ人が70%以上のもの

ナガラ節の結果継続の読みについては、熊本・高知方言話者と、東京方言話者とでは異なる傾向が見られた。東京方言話者では「着ナガラ」で約67%、「汚しナガラ」で約62%が結果継続と認識している。

「着る」について調査では次のような文を使用した。

(19) 花子は服を着ながら姉と話した。

(20) 花子は服を着ながら3時間接客した。

(19)は動作進行の文脈、(20)は結果継続の文脈である。表3の「進行」の数値は(19)の例

文を見て「服を着るといふ動作をしている最中。まだ服を着終わっていない。」と答えた人の割合、「結果」の数値は(20)を「服を着たあと、身につけている状態」と答えた人の割合である。(20)は熊本、高知方言話者では動作進行の読みも結果継続の読みも「×」を選ぶ人が「○」を選ぶ人を上回っており、(20)の文そのものを許容できない人が多かった。(4)「花子は服を{着ナガラ/着たママ}3時間接客した。」の文で、熊本・高知方言話者がタママ・ナガラの置き換えができないのはこのためである。一方、東京方言話者は67%が結果継続と捉えているため、タママ・ナガラの置き換えが可能となる。つまり、「着る」は東京方言では維持の局面を持つが、熊本・高知方言では維持の局面を持たないということである。

#### 4.3 ナガラ節が動作進行と結果継続を表す動詞群「座る、立つ、乗る」

「座る、立つ、乗る」は工藤の分類では主体変化動詞（内的限界動詞）で、人の意志的な（位置・姿勢）変化動詞である。このグループの動詞では、ナガラ節が動作進行と結果継続の両方の局面を表す。ナガラ節を見る前に、まず、テルトコ形のアスペクト領域を見ると「今、座ッテルトコ/立ッテルトコ/乗ッテルトコ」は東京方言では結果のみを表すのに対し、熊本方言は動作の進行を表す。さらに高知方言では進行に加え、「乗ッテルトコ」が結果継続として認識されている。また「座ッテルトコ」で59%、「立ッテルトコ」で66%が結果継続に○を付けていることから、高知方言話者はこのグループの動詞のテルトコ形では、動作継続と結果継続の両方の局面を認識する傾向があるといえる。「乗ッテルトコ」については、熊本方言話者も67%が○を選んでおり、結果継続と認識する傾向が認められる。

この動詞グループのテルトコで取り出される局面は、東京方言話者では動作の結果継続の局面であるのに対して、熊本方言話者では動作継続の局面、高知方言話者では動作継続と結果継続の両方であるという点は興味深い。

表4 テルトコが進行と結果を表す動詞の判定(%)

|               | ヨル   |      | トル   |      | テルトコ |      |      | ナガラ  |      |      |
|---------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|               | 熊本   | 高知   | 熊本   | 高知   | 熊本   | 高知   | 東京   | 熊本   | 高知   | 東京   |
| [座る] 進行       | 93.4 | 91.0 | 8.5  | 2.0  | 80.2 | 73.0 | 32.7 | 90.6 | 93.0 | 75.0 |
| [座る] 結果       | 11.3 | 40.0 | 100  | 99.0 | 47.2 | 59.0 | 77.9 | 75.5 | 84.0 | 86.5 |
| [立つ] 進行       | 95.3 | 95.0 | 5.7  | 0.0  | 77.4 | 75.0 | 28.8 | 77.4 | 71.0 | 64.4 |
| [立つ] 結果       | 10.4 | 17.0 | 99.1 | 99.0 | 49.1 | 66.0 | 82.7 | 75.5 | 80.0 | 89.4 |
| [(バスに)乗る] 進行  | 99.1 | 94.0 | 7.5  | 2.0  | 73.6 | 78.0 | 27.9 | 95.3 | 97.0 | 74.0 |
| [(バスに)乗る] 結果  | 11.3 | 24.0 | 100  | 98.0 | 67.0 | 76.0 | 85.6 | 82.1 | 84.0 | 87.5 |
| [(自転車に)乗る] 進行 | 90.6 | 79.0 | 24.5 | 16.0 | 70.8 | 75.0 | 31.7 | 86.8 | 80.0 | 64.4 |
| [(自転車に)乗る] 結果 | 33.0 | 71.0 | 95.3 | 94.0 | 67.0 | 77.0 | 78.8 | 80.2 | 87.0 | 85.6 |

網掛けは○を選んだ人が70%以上のもの

畠山 (2007) は高知方言では「座る, 立つ, 乗る」のヨル形式とトル形式は中和し, どちらも主体変化結果維持を表現すると指摘している。本調査の結果を見ると, 「(自転車に) 乗る」71%以外は, 結果維持と捉える読みは少なく, 変化進行の局面を捉えるものが優勢であった。しかし, 表3で高知方言話者が「着る, 片付ける, 汚す」のグループでヨル形式を結果維持と捉える割合が0~4%であるのに対し, 表3で「座る, 立つ, 乗る」のヨル形式を結果維持と捉える割合は「立つ」17%, 「(バスに) 乗る」24%, 「座る」40%と高く, 熊本方言話者の「立つ」10.4%, 「(バスに) 乗る, 座る」11.3%, 「(自転車に) 乗る」33%に比べても高いといえる。

テルトコ形のアスペクトが東京方言話者と異なるという結果は, ヨル形式が動詞のどの局面を取り出しているのかといった問題と関連している。つまり, 東京方言では「座っテイル, 立つテイル, 乗っテイル」を結果継続の局面として捉えており, テルトコ形式の表す局面もこれと同じである。一方, 西日本方言には共通語のテイルのような不完成相を表す形式としてヨルがあり, テルトコで取り出される局面はヨルの影響を受けているようだ。高知方言と熊本方言のテルトコが変化の進行を表すのはこのためではないか。

テルトコ形式が表す局面を結果継続と捉える割合が, ヨル形式を結果継続と認識する割合より高いのは, テイル形式が共通語形式であることの影響であると考えられる。熊本・高知方言話者が共通語形式を使用するとき, テイル形式のアスペクト的局面は共通語と同じように捉えようとしているはずである。しかし, 「今, ~テルトコ」のような, 文脈の助けのないフレーズでは, ヨル形式のアスペクト的局面を無意識にあてはめてしまうのではないか。つまり, 熊本・高知方言話者のテルトコ形はヨル形式と, 共通語のテイル形式双方の影響を受けているため, ヨル形式とも, 東京方言話者のテルトコ形とも, 異なる結果となっていると考えられる。

ナガラ節のアスペクトについて見ると, この動詞のグループのナガラ節は進行と結果継続の両方の局面を表すことがわかる。

(21) 太郎はバスに乗りながら, 「じゃあ, また」と言った。

(22) 太郎はバスに乗りながら, 英単語を覚えた。

(21)は動作進行の文脈, (22)は結果継続の文脈である。(21)を「乗りこむという動作をしている最中。まだ乗り終わっていない。」と答えた人はナガラ節を「進行」と捉えており(22)を「乗りこむという動作が終わり, バスの中にいる状態。」と答えた人はナガラ節を「結果」と捉えているとして教えた。

東京方言話者の「立つ」と「(自転車に) 乗る」の進行読みが70%に満たないが, いずれも64.4%の人が○を選んでいることから, 結果継続に加えて文脈によっては進行としても認識される傾向があると言える。

調査の結果, このグループの動詞は, 「ゆっくりと」や「30分」といった副詞の共起があれば動作進行, 「英単語を覚えた」のような文脈の支えがあれば結果継続の局面を表すことができることがわかった。1節で日本語教育ではこのグループの動詞は「座り/立ちナガラ食べる」ではなく「座って/立って食べる」と教えると述べたが, 日本語母語話者には「座り/立ちナガラ待つ」のような使い方が広く許容されていることがうかがえる。

今回の調査で「乗る」は「バスに乗る」と「自転車に乗る」の2種類の判定文を用意した。「バスに乗る」は位置変化だが、「自転車に乗る」は動作的要素が加わる。熊本方言話者は「サーフボードに{のりナガラ／のったママ} 砂浜を眺めた」のナガラをタママに置き換えられないことは既に指摘したが、表4を見ると熊本方言で「自転車に乗りナガラ」は結果継続を表している。これは、熊本方言話者が「自転車に乗る＝自転車をこぐ」のように動作を含意するものと捉えているからではないだろうか。「自転車に乗りナガラ英単語を覚える」のナガラ節は、確かに乗った後の局面を表すが、それは、「乗ったママ」とは違い、運動の局面と捉えられている。同様の理由で熊本方言話者は「サーフボードにのったママ～」を「のりナガラ」に置き換えられないのである。一方、「バスに乗る」は「自転車をこぐ」のような動作を含意しないため「バスに乗りナガラ／乗ったタママ」は熊本方言話者でも置き換えが可能となる。

東京方言話者と熊本方言話者の違いとしては、熊本方言話者は進行読みの方が結果読みよりパーセンテージが高く、東京方言話者は逆に結果読みの方が高い数値を示しているという点が指摘される。東京方言話者の結果読みが優勢なのは共通語の「座っテイル、立つテイル、乗っテイル」が結果継続を表すためであり、熊本方言話者の進行読みが優位なのは、ヨル、テルトコで取り出される局面が動作進行の局面であることと関連していると考えられる。

同様に高知方言話者でも、テルトコ形で進行の局面を表す動詞についてはナガラ節でも進行読みが優勢で、テルトコ形で結果継続の局面を表す動詞についてはナガラ節でも結果継続の読み優勢であることがわかる。

ナガラ節のアスペクト領域がテルトコ形より広いのは、テルトコがテイルというアスペクト形式を内包しているためであろう。テイルは動詞が語彙的に持つアスペクト的意味の不完成相（継続相）を取り出すという機能をもっており、「着テイル」のように、もともと動作進行と結果継続の両面を持つ動詞以外は、文脈によってそのアスペクト的的局面が変わるということはない。

一方、ナガラ節は、文脈の影響を受け、文脈からもたらされるアスペクト的意味を読み取ろうとする意識が働く。「花子はゆっくりと座りナガラ、隣のテーブルを見た」では、後件の出来事が短い時間に起こるため「座るという動作をしている最中」という進行読みが可能だが、「花子は座りナガラ、30分太郎を待った」は、後件の成立には30分という時間幅が必要となるため、「座るという動作をしている最中」という進行読みができず、結果継続の局面を読み取ることになる。熊本・高知方言で「座っテルトコ」は結果の局面を表さないのに、「座りナガラ」が結果の局面を表すのは、文脈情報から事態を読み取ろうとする作用の結果である。しかし、どのような動詞でも文脈さえあれば文脈が指定する局面を読み取れるかという点、そうではなく、前述のように(20)「花子は服を着ながら3時間接客した」という文を熊本・高知方言話者は非用だと判断する。つまり、テルトコが表さないアスペクト局面を、ナガラ節で捉えることがあるが、動詞によっては、文脈の助けがあっても表すことのできない局面があり、それは方言によって異なるということが明らかになった。

## 4.4 ナガラ節が結果継続を表す動詞群「握る、よりかかる、ぶらさがる」

このグループの動詞は、東京方言話者ではナガラ節とテルトコ形が表すアスペクトは一致しているが、熊本・高知方言では違いが見られる。

「握っテルトコ、よりかかっテルトコ、ぶらさがっテルトコ」について東京方言話者は、80%以上の高い割合で結果継続のみを表し、高知方言話者は進行も結果継続も表している。熊本方言話者は表5を見ると、「よりかかっテルトコ、ぶらさがっテルトコ」の結果継続のみが70%を超えているが、ほかの動詞の、進行・結果継続のどの値も66%~68%と高く、熊本方言話者でも進行と結果継続の両方の局面を表す傾向があると言える。

「握る」は工藤（1995）の分類では「着る」と同じ主体変化・主体動作動詞の中の再帰動詞である。しかし、東京方言話者の判定では着テルトコは進行を表し、握っテルトコは結果継続を表す。これは次のような理由によるものと思われる。森山（1988）は共起する副詞的成分を手掛かりに動詞のアスペクトの類型をまとめているが、そこでは「着る」は〈過程〉によって変化が生じ、その結果が〈維持〉されるという特徴を持つ動詞群に分類されている。一方「握る」は〈維持〉の局面はあるが、〈過程〉の局面はない動詞群に分類されている。このような〈過程〉の局面のない「握る」のテルトコ形は、東京方言話者では結果継続の局面のみを表す。

表5 ナガラ節が結果継続を表す動詞（%）

|            | ヨル   |      | トル   |      | テルトコ |      |      | ナガラ  |      |      |
|------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|            | 熊本   | 高知   | 熊本   | 高知   | 熊本   | 高知   | 東京   | 熊本   | 高知   | 東京   |
| [握る] 進行    | 87.7 | 88.0 | 10.4 | 6.0  | 67.9 | 76.0 | 27.9 | 84.9 | 79.0 | 59.6 |
| [握る] 結果    | 20.8 | 40.0 | 100  | 98.0 | 66.0 | 76.0 | 79.8 | 80.2 | 86.0 | 90.4 |
| [よりかかる] 進行 | 91.5 | 91.0 | 14.2 | 4.0  | 69.8 | 76.0 | 15.4 | 64.2 | 64.0 | 48.1 |
| [よりかかる] 結果 | 18.9 | 36.0 | 97.2 | 99.0 | 67.0 | 77.0 | 87.5 | 85.8 | 89.0 | 87.5 |
| [ぶらさがる] 進行 | 86.8 | 88.0 | 16.0 | 4.0  | 67.9 | 72.0 | 16.3 | 58.5 | 57.0 | 36.5 |
| [ぶらさがる] 結果 | 23.6 | 52.0 | 96.2 | 99.0 | 70.8 | 81.0 | 87.5 | 82.1 | 93.0 | 90.4 |

網掛けは○を選んだ人が70%以上のもの

「着る、片付ける、汚す」「座る、立つ、乗る」のテルトコ形では、熊本・高知方言は動作・変化の進行の局面を表していたが、「握る、よりかかる、ぶらさがる」では進行と結果継続の両方を表す。テルトコ形が進行の局面を表すのは、熊本・高知方言はヨル形式を持つため、東京方言話者とは異なり「握る、よりかかる、ぶらさがる」の〈過程〉の局面も、とりだすことができるからである。

次に結果継続の局面を表す理由について考える。「握る、よりかかる、ぶらさがる」は変化の結果が〈維持〉される局面が動詞の意味が実現する局面と捉えられているのではないかと考えられる。「走る」のような主体動作動詞の意味が実現する局面が動作進行の局面であり、「倒れる」のような変化動詞の場合、まさに変化する、その局面が想起されるのに対

し、「握る、よりかかる、ぶらさがる」では、結果継続の局面が想起される。これはこの動詞群の大きな特徴であると考えられる。

また、表5のヨル形式のアスペクトを見るとヨル形式が結果の継続を表すと捉える人の割合が他の動詞群に比べて高いこと、逆に動作の進行と捉える人の割合が他の動詞に比べ、比較的低いことが観察される。森山(1988)は「握る、よりかかる、ぶらさがる」の結果継続の局面は〈維持〉の局面として捉えている。「握りツヅケル、よりかかりツヅケル、ぶらさがりツヅケル」が表す局面は、「動きの結果の保存が主体的に行われ、過程と結果持続の中間的なもの」(森山(1988))と定義した〈維持〉の局面である。〈維持〉の局面はヨルの表す不完成相に近づくため、ヨル形式が結果の継続を表す割合が高くなっていると考えられる。

熊本・高知方言話者のテルトコ形が、進行と結果継続の両方の局面を表すのはこのような理由によるものと考えられる。

ナガラ節については、どの方言も同時進行ナガラ節が結果継続を表し、熊本方言・高知方言では「握りナガラ」が動作の進行も表す。このグループの動詞は次のような文のナガラ節について判定してもらった。

(23) 太郎はドアノブをゆっくりと握りながら、「夢かもしれない」と思った。

(24) 太郎はお母さんの手を握りながらおにぎりを食べた。

(25) 太郎は壁にゆっくりとよりかかりながら、外を見た。

(26) 太郎は壁によりかかりながら、しばらく外を見た。

(27) 太郎は大きい木の枝に急いでぶらさがりながら、下を見た。

(28) 太郎は校庭の鉄棒にぶらさがりながら、静かに夕日を眺めた。

(23)(25)(27)は動作進行の文脈、(24)(26)(28)は結果継続の文脈である。(23)を「5本の指を内側に徐々に動かしている最中。まだ握り終わっていない。」、(25)(27)を「よりかかる／ぶらさがるといふ動作をしている途中。まだ、よりかかり／ぶらさがり終わっていない。」と答えた人はナガラ節を「進行」と捉えており、(24)(26)(28)を「握った／よりかかった／ぶらさがった後の状態。」と答えた人はナガラ節を「結果」と捉えているとして数えた。

「握りナガラ、よりかかりナガラ、ぶらさがりナガラ」は東京方言話者には結果継続の局面として捉えられる。熊本・高知方言話者は(23)のナガラ節を、「5本の指を内側に徐々に動かしている最中。まだ握り終わっていない。」といった、動作進行の局面と捉えており、(25)(27)についても57%~64%が動作進行の局面と捉えている。一方、東京方言話者は「握りナガラ」の進行読みが60%とやや高いが、「よりかかりナガラ」は48%、「ぶらさがりナガラ」は37%と低い。

一方で、熊本・高知方言話者の「よりかかッテルトコ、ぶらさがッテルトコ」の進行読みと、結果継続読みがほぼ同じ数値で、どちらが優勢ともいえないのに対し、ナガラ節では結果読みが80%以上と、きわめて高いのはなぜだろう。理由のひとつとして次のようなことが考えられる。判定文作成にあたって、「よりかかる、ぶらさがる」の進行読みの文脈を作るのにかなり苦勞をしたことから言えるのだが、ナガラ節で「よりかかる、ぶらさがる」が動作継続となるような文脈はきわめて特殊である。その特殊な文脈でも約57%~

64%が動作進行の局面と認識しているという点は、東京方言話者との明らかな違いとして指摘できるだろう。

## 5. まとめ

方言によって共通語形式であるナガラ節、テルトコ形のアスペクト認識が異なるのではないか、という仮説を立て調査を行った結果、熊本・高知方言話者と東京方言話者では、共通語使用場面で、アスペクト認識に違いが見られた。4節の調査結果をまとめると次のようになる。

### 「片付ける、汚す、着る」

3方言による差は見られず、すべての方言で、非内的限界動詞である主体動作動詞同様、ナガラ節、テルトコ形のアスペクトは動作進行の局面を表す。

### 「座る、立つ、乗る」

テルトコ形：東京方言では結果継続の局面、熊本方言では進行の局面を表す。

高知方言では「座る、立つ」は進行の局面、「乗る」は進行と、結果継続の局面を表す。

ナガラ節：熊本・高知方言では進行、結果継続の両方を表す。

東京方言話者では「立つ、(自転車に)乗る」の動作進行の読みが弱い。東京方言話者は結果継続、熊本方言話者は動作進行の読みが優位である。

### 「握る、よりかかる、ぶらさがる」

テルトコ形：東京方言では結果継続の局面を表す。

熊本、高知方言では変化進行と結果継続の局面を表す。

ナガラ節：東京方言では結果継続の局面を表す。

熊本、高知方言話者は「握る」で進行と結果継続を表す。「よりかかる、ぶらさがる」では結果継続のみを表す。

2項対立のアスペクト体系をもつ東京方言と3項対立の熊本・高知方言との間に見られた相違は、熊本・高知方言のヨル形式が、内的限界動詞の運動の局面を捉えることの影響によるものであると考えられる。東京方言では内的限界動詞のテルトコ形は結果継続の局面を捉えるが、熊本・高知方言では内的限界動詞であっても動作・変化の進行という動的局面を捉えることが可能な動詞にテルトコが接続すれば、テルトコ形は進行の局面を表すことができるのである。

また、3項対立のアスペクト体系を持つ西日本方言の間でアスペクトの捉え方は同じであるのかという問いに対しては、動詞によって差が見られた。テルトコとナガラはともに共通語形式であるが、その使用にあたっては東京・熊本・高知の各方言によって違いが見られた。このことがナガラ文の文法性判断にも作用し、日本語母語話者の間に“ゆれ”が生じていると思われる。

同時進行ナガラは森山(1988)で動詞の性質を規定したり、動詞を分類するためのテスト

トとして用いられており、シツヅケル、シハジメルなどと同様アスペクト形式として捉えられている。しかし、今回観察されたような“ゆれ”は動詞分類のためのテストにも影響を及ぼすと考えられる。ナガラ節のアスペクトは誰もが同じように捉える規範的なものから、判定に迷うもの、母方言によっては認識の異なるものまで段階的に分類されると思われる。

今回の調査で明らかになったような“ゆれ”が日本語母語話者の中にあることはまだまだ報告されていない。今回の調査は熊本、高知、東京の3地域の方言話者を対象にしたが、今後調査地域を広げ、分析を進めていきたい。

#### 注

- (1) 畠山(2007)は結果維持動詞は「瞬間テスト」「いつテスト」「ナガラ・タママテスト」にパスするとしている。「瞬間テスト」とは「～した瞬間」が「～しハジメタ瞬間」と言い換えられるかどうかを判断するテストである。これにパスする動詞は動作動詞のように開始限界が語彙的に指定されており、かつ終了限界が無指定の、非限界動詞である。「いつテスト」とは「～したのはいつ?」という文に「発話時に～している」を前提とする読みがあるかどうかを判断するテストである。このテストにパスする動詞は限界動詞である。
- (2) 「昨日山田さんに会っていながら、そのことをすっかり忘れていた」「犯人を見ていながら、黙っていた」のように～テイナガラは常に逆接の意味となる。

#### 参考文献

- (1) 岡本牧子, 沢田幸子, 安田乙世 (2009) 『はじめて日本語を教える人のためのなっとく知っとく初級文型 50』スリーエーネットワーク pp142-147
- (2) 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- (3) 工藤真由美 (1999) 「西日本諸方言におけるアスペクト対立の動態」『阪大日本語研究』11, pp1-17
- (4) 工藤真由美 (2001) 「アスペクト体系の生成と進化—西日本諸方言を中心に」『ことばの科学』10, pp117-173
- (5) 工藤真由美 (2004) 「研究成果の概要—アスペクト・テンス・ムードを中心に—」工藤真由美編『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系—標準語研究を越えて—』ひつじ書房 pp34-76
- (6) 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』
- (7) 畠山真一 (2007) 「高知方言のアスペクト形式と時間性に基づく動詞分類」『日本語科学』21, pp65-88
- (8) 森山卓郎 (1988) 『日本語述語動詞文の研究』明治書院
- (9) 和田礼子 (1998) 「逆接か同時進行かを決定するナガラ節のアスペクトについて」『日本語教育』97号, pp94-105